

流行歌が映し出す時代の影

貴志俊彦著

東アジア流行歌アワー

—越境する音交錯する音楽人

榎本 泰子



四六判 284頁
岩波書店
[2415円]

東アジアの近代を租界、満洲国、メデアなどさまざまな切り口から意欲的に読み解いてきた貴志俊彦氏が、次なる対象として選んだのが「流行歌」である。一見するとテレビの歌番組のような書名だが、内容は歴史学者らしくなかなか重い。本書の構成は以下のとおりである（章タイトルのみ、各節のタイトルは省略）。

序章 「帝国圏」と「華語圏」の流行歌

第一章 東西音楽の融合——ダンス音楽とレコード歌謡の

幕開け

第二章 ラジオとトーキー映画——抵抗と啓蒙から生まれ

た流行歌

第三章 一九三〇年代——東アジアにおける流行歌の時代

第四章 戦争と流行歌——「軍歌」「戦時歌謡」vs. ジャズ

ソング

第五章 戦争の残影——戦後直後の流行歌の光と影

第六章 植民地と革命の継続——香港と中国

終章 「歌」の解放？ それとも分断？

著者は序章で、本書の目的を「流行歌が成立する二〇世紀初頭から、それが衰退する六〇年代末頃までの東アジアの流行歌を、時代性・地域性・社会性の三つの側面から説き起こすこと」とする（五頁）。日本で「流行歌」という名称が定着したのは一九三〇年代とされ（七頁）、すでにレコードという音楽産業が発達してただけでなく、ラジオ・トーキー映画・グラビア雑誌などの「多様な媒体が流行歌を生みだす

装置として登場していた」（二五頁）。東京・大阪をはじめ、上海・香港・台北・台南・ソウル（旧・京城）など東アジアの諸都市で、多少の時間差はあれ同じ状況が見られたといい、楽曲そのものや、音楽人（歌手、演奏家、作曲家、作詞家）の往来を広い視野で把握しようとしたのが本書である。

これまで個人の回想録などを別として、音楽の「越境」については十分に語られてこなかった。クラシックにしてもジャズにしても、「西洋から東洋へ」という受容の歴史は多く研究されてきたが、東洋の各地域・都市の間でどのような伝播の状況があったのかを明確に記したものは少ない。本書の最大の功績は「流行歌」（ジャズソングを含む）に関して、「越境」のありさまを網羅的に記したことであろう。李香蘭（山口淑子）が歌と演技をもって日本や満洲、上海等を自在に往来したことは彼女の自伝を通じてよく知られているが、淡谷のり子が一九三〇年代の日本における「アリアン」ブームの担い手の一人であったとか（五四頁）、代表曲「別れのブルース」（一九三七年）が当初日本国内では売れず、「関東州や満洲で火がつき、長崎、神戸、大阪、横浜と東上し、ついに東京で爆発的なヒットをした」（九六頁）ことなどは、「越境」の実例として興味深い。

本書は近年活字以外のメディアに注目してきた著者が、本

格的にレコードを取り上げた研究の成果である。序章で紹介されているように、大阪の国立民族学博物館には戦前のコロムビア・レコードの原盤が大量に保存されており、すでにディスクグラフィイー（レコード目録）が編纂されているほか、これを元にした共同研究が現在も続いている（こうした日本国内の研究動向のみならず、中国・香港・台湾・韓国で公刊された基礎資料について、「コラム」として各章で解説されているものもある）。音楽は演奏されればその場で消えてしまいが、レコードという音の記録がどのように移動したかを追究することで、各地域・都市の間で一つの楽曲がどのように伝わったかを明らかにすることができる。本書ではレコードの生産・販売・流通についての記述が所要所で行われ、レコード会社どうしの競争やレーベルの盛衰についても詳しい。ある音盤がどこで録音されどこでプレスされたかという情報からも、都市と都市の関係性や時代状況を読み取るうとする。たとえば「華語圏」流行歌の中心は戦前は上海であったが、戦後は香港に移動したことに關してこう説明する。

「この頃の百代のレーベルには、戦前の『上海百代公司唱片』の名称から『上海』の二字が消えており、たんに『百代（公司）唱片』というシンプルな名称が印刷されているだけだった。しかも、レコード・レーベルには、録音が香港、プレ

スがインドと印刷されているものもある。百代がイギリス系のEMIであったことから、レコード・プレスの設備がなかった香港に代わり、戦後イギリスから独立したインドでレコードのプレスをしている点は興味深い」（二二八頁）。

インターネットの動画サイトでは香港や台湾の収集家と思われる人々が貴重な音源を公開しているが、これまで一部のマニアが共有していたような情報を、本書は研究のレベルに引き上げ平明に書き起こしてくれた。私自身も上海や香港などで古い流行歌のCDを買い集めた時期があったが、整理しきれず段ボール箱に詰めてあったそれらに、本書は歴史的な見取り図を与えてくれたように感じる。

ただし本書の価値は、東アジアの近代史や上海・香港などの文化状況がある程度わかっている読者でないと伝わりにくい面がある。本来「越境」は「境」がある（と信じられている）時にそれを乗り越えるおもしろさがあるのだが、著者はあらかじめ日本とその植民地を軸とした「帝国圏」と、中国から香港を経て東南アジアの華僑社会につながる「華語圏」という広い「流行歌の地政圏」を前提としているので（二六頁）、各地域・都市の状況は並列的に書かれるのみで個別の背景等はさらりと流されている。

また歌のタイトルや人名などの情報量が多く、巻末の人名

索引を利用すればデータブックとしても使えるような反面、全体としてやや羅列的な印象を受け、音楽があまり生き生きと聞こえてこない。そもそも著者が記述の上で重視しているのは、華やかな流行歌という「光」よりも、戦争や植民地支配といった時代の「影」である。そのことは、著者が本書冒頭で歌詞の語彙分析はしないと宣言し、戦争や植民地支配という時代背景の中で「音楽人の組織的・集団的意識がどこまで貫徹できたかを考えると、歌詞の内容だけをたよりに表面的な意味論を展開するだけでは、流行歌をめぐる問題の本質にどれほどに近づけるのかと思う」（五頁）と述べていることからよくわかる。

しかし時折、音楽好きらしい著者が貴重な音源を聴いた時の興奮が伝わってくる。たとえばかの「東洋のマタ・ハリ」川島芳子が自ら歌声を録音しているという。その一つ「十五夜の娘」（作詞川島芳子、モンゴル民謡、一九三三年）は「いささか調子はずれの芳子の歌を、コロムビア・オーケストラの伴奏がなんとかタンゴの曲としてフォローしている」（九二頁）。モンゴル民謡を一体どのように編曲すればタンゴになるのかわからないが、これもジャンルの「越境」と言えるのかもしれない。こうした読む者が耳をそばだてるような記述がもっとあれば、本書はより幅広い読者を獲得することがで

きただろう。

それでも本書が各国の文献や音声・映像資料を渉猟した労作であることには変わりはない。植民地支配下の朝鮮から戦後の韓国に至る流行歌の流れなど、これまで知らなかったことも多かった。また個人的には上海租界の音楽人の交流について書かれた部分を興味深く読んだ。私は近年、上海のライシャム・シアター（蘭心大戲院、錦江飯店の裏手に現存）をめぐる共同研究に参加しており（代表Ⅱ大橋毅彦・関西学院大学教授）、一九三〇年代から四〇年代にかけての劇場芸術の様相を明らかにしてきた。演劇、オーケストラ、バレエなど、主に租界在住の外国人を主体とする芸術の殿堂であったライシャム・シアターは、日本軍支配下になると中国人に対する文化工作の舞台となる。本書第四章第六節で紹介される「戦時上海の

音楽イベント」はまさにそのあたりのことを書いているが、日本側の関与の度合いについては記述があいまいである。補足的に述べるとすれば、工部局が管理運営してきたオーケストラを引き継ぐために日本側が設立した「上海音楽協会」が、時局の悪化とともにクラシックだけでなくポピュラーに手を出し、より直接的に中国人市民にアピールしようとした、というのが私の見立てである。

これに関連し本書一六八頁から一七三頁にかけて、一九四四年一〇月から終戦直前までに開かれた流行歌の演奏会がいくつか紹介されている。舞台として「光明大戲院」と何度も出て来るが、「大光明大戲院」（グラランド・シアター）の誤りであろう。また作曲家の陳歌辛がこの時期日本側と協力関係にあり、彼の作品が数多く歌われていることが言及され

近世東アジア

比較都城史の諸相

新宮学 編著

近世東アジアの都城および都城制に関する共同研究の成果を取録。特に北京をはじめとする近世都城を中心に、歴史学的方法に考古学や地理学的知見を加えて、政治史、社会史、歴史地理、考古学、環境史、儀礼研究など多様な研究視角から分析した。

妹尾達彦・桑野栄治・中村篤志・久保田和男・渡辺健哉・著
張学鋒（小尾孝夫訳）・橋本義則・馬彪・成一農

■6600円

中国語量詞の機能と意味

— 文法化の観点から —

橋本永貞子 著 第1章 序論 第2章 属性叙述における量詞の機能と意味 第3章 事象叙述における量詞の機能と意味 第4章 名量詞の成立について 第5章 動量詞の成立について 第6章 量詞成立以降における用法の変遷について 第7章 量詞の変遷と文法理論 第8章 量詞とグラウンディング機能 ■4200円

白帝社

※価格は税込
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-6-51
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

る。服部良一が主導した李香蘭のリサイタルでも陳歌辛のヒット曲が取り上げられた。しかしそのわずか一週間後に陳歌辛の作品のみで構成された大音楽会が開かれ、周璇、白虹、李香蘭などのトップスターが顔を揃えたことは書き落とされている。関心のある向きは拙稿「中国音楽史から消えた流行歌——もう一つの『夜来香ラプソディー』」(『東洋史研究』第六九巻第三号、二〇一〇年二月)を参照されたい。ちなみに本書でも言及されている『上海老歌名典』を編纂し、中国流行歌の復権に尽力している陳鋼(上海音楽学院教授)は陳歌辛の息子である。陳歌辛は戦時中の日本軍への協力を理由に「右派」とされ、労働改造に送られたまま亡くなった。

著者は今日の「自由さ」が「音楽を究極的なまでに個人的なものとし、文化産業としての音楽を危機的な状況に追いやっている」(二六〇頁)と述べる。しかしレコードが担う「流行歌」の時代は終わっても、インターネットなど新たなメディアによって「越境」はさらに容易になり、東アジアどころか全世界の人々が同じ一つの歌に熱狂することが可能になった。PSYの「江南スタイル」などを挙げるまでもなく、「流行」という現象は今後もなくならないだろうし、時代が求める歌を生みだそうとする人々の努力や情念も尽きることはないだろう。音楽をめぐる歴史は今も進行中である。

(えのもと・やすこ) 中央大学)

民国期美術探究シリーズ② 「近代中国美術の胎動」刊行記念
グローバルレクチャー「近代中国美術の諸相入門」

近代中国美術には日本の影響が無視できません。ここに注目して『近代中国美術の胎動』(勉強出版)を刊行しました。執筆者が平易な言葉で近代中国美術と日本を語る機会を設けました。お誘い合わせの上、ご参加ください。

▼日時・3月9日(日) 13時～17時(12時30分開場) ▼場所・アカデミー文京/学習室(東京・文京シビックセンター1158051 文京区春日1-1-51) 後楽園駅・春日駅直結)
▼主催・「近代中国美術の諸相入門」レクチャー実行委員会(協力・日中藝術研究会) ▼講師と内容(順不同)◇「模写」の真意は何処に―金城の絵画と絵画論 北京の伝統画壇を革新した画家・金城の創作を解説する 戦暁梅(東京工業大学)◇民国期の伝統版画に就いて 魯迅と鄭振鐸が復刻した明末「十竹齋箋譜」の藝術性 瀧本弘之(著述家)◇呉昌碩が日本にもたらしたもの 清朝最後の文人・呉昌碩は日本に何を与えたのか 松村茂樹(大妻女子大学)◇斎藤佳三と林風眠 東京美術学校の斎藤佳三と西湖藝術院の林風眠の知られざる交流 吉田千鶴子(東京藝術大学)◇呉友如―清末から民国へ 近代中国の生んだ「イラストレーター」 呉友如―その創作の秘密 三山陵(大東文化大学)
▼お問い合わせ・日中藝術研究会 nichigaiken@yahoo.co.jp
☆参加申込みは日中藝術研究会ホームページ (<http://www.geocities.jp/ngeiken>) から☆当日、資料パンフレット代五百円を申し受けます(事前申込み割引あり)。